浄土

昭和十年五月廿日　第三種郵便物認可
昭和二十四年四月二十八日　運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和三十八年十一月二十五日　印刷　昭和三十八年十一月一日
（毎月一回一日発行）

十一月号

—現代仏教批判—

法然上人鑽仰会

表紙の解説

善財童子像

康円作

ヘルマン・ヘッセの代表作のひとつである「シッダルタ」には、求道者シッダルタが遊女カマラに出会って、生活を共にしながら、「小児人種」にあこがれることが強調して語られている。その「小児人種」とは一体なんであろうか。とりもなおさず、おとなの色メガネというレンズを通して物事を見、きめつける態度のない、すなおさそのものを指してもいる。喜びを喜びとして、悲しみを悲しみとして、そのままに受けとり表現する世界でもある。

華厳経に説かれる「善財童子」はまさにそういう童子であって、決して単なる青年ではない。「童子」のもつ大きな意義を汲みとるべきであろう。その姿のもっともすばらしく開花したのがこの康円の作になる善財童子像である。首から肩へ、肩から胸へとやわらかくふくらんだ線、仏をふりあおぐ瞳と輝く額、これだけで充分なほどに秀れた技法が駆使されている。腰をわずかにひねって合掌するリズムも見事といわざるをえない。無心の境地とでもいおうか、童子性の浮き彫りの心にくさをともに味わってみよう。それは横山大観の「無我」にも通じるし、また、私たちの心の中に求めるべき童子性である。

（石上善応）

選擇集私解

大正大学教授 文博 竹中信常著

新書版 一二〇頁
定価 二〇〇円
送料 三〇円

法然上人が現代においでになったら「選択本願念仏集」をこのようにおときになるであろう　念仏信仰の真髄を明らかにした全浄土宗徒必読の書

▷目　次◁

宗祖と共に
やすらけき旅路
念仏にすけささぬ
特急「ごくらく」号
砂糖と塩
いつでもどこでも
ふり仰ぐ山の高さ
浄土への道
借金と念仏
サシミ念仏
一に一たす二
偏依法然
あとがき

発行人　法然上人鑽仰会
発行所　大　道　社

浄　土

十一月号

かまへて善人にしてしかも念仏も修すべし。是を真実に仏教にしたがふものといふ也。

法然上人御法語

——◇ 目　次 ◇——

表紙　善財童子像

浄土教の現実的意義 ……岸　覚勇…（2）

特集　現代仏教批判

敢えて危機と云う ……安居香山…（8）
仏教々団の人々へ ……白幡憲佑…（11）
仏教へのねがい ……大江静子…（14）
一冊の聖書 ……山田久男…（16）
〔座談会〕
現代の青年は仏教をいかに見また何を考えているか …（18）

ありのままの宗教（3）
　未顕真実 ……渋谷賢応…（23）
学会手引（3）
　延びる組織の現状 ……（26）
一枚起請文講話（四）
　信仰の極致 ……村瀬秀雄…（28）
御法語をいただく ……（7）

東京都港区赤坂青山南町四ノ九
梅窓院
中島真哉

浄土教の現実的意義

岸　覚勇
（仏教大学講師）

浄土教とは往生浄土教の略で、浄土に往生するを目的とする宗教の意である。故にその「往生」なる語を未来の義に解すれば、未来主義の宗教ということになって、現実味はないと解され易いのであるが、然し「往生」を未来の義と解しても、必ずしも未来主義と断定することは出来ない。

現に我が浄土宗も「往生」とは未来に西方極楽に往生するの義と解しているが、その往生を得るための念仏を唱うれば、その往生を得るまでの過程に於て、幾多のすばらしい御利益を頂くのである。その往生への過程に於ける御利益は現実的なものであるから、そこにこそ浄土教の現実的意味があるのである。

○

初めにその問題に入る前に、浄土宗の往生の意義について開明したいと思う。この頃いろいろの学者によって往生なる語の新解釈がなされて、一般大衆に理解し易いように説かれているのを見て、その努力の並々ならぬを感謝するものであるが、今は浄土宗の正しい信仰を得る意味に於て、歴代祖師の御解釈を探って見よう。法然上人は「往生とは草庵に目を瞑むるの間、便ち是れ蓮台に趺を結ぶの程、即ち弥陀仏の後に従い、菩薩衆の中に在りて一念の頃に西方極楽世界に生ずることを得るが故に往生と言うなり」と云って、往生とは阿弥陀仏の臨終来迎を得て西方極

楽に生るの義とされ、鎮西上人は「往生とは此れを捨て彼に往くなり」と云われ、記主禅師は「往生とは此を捨て彼に往いて池の蓮華の中に生ず」と云い、また岡師は「往生とは此れを捨て彼に往き、蓮華に化生するなり」と云って、列祖は皆同じように死んでから此の娑婆世界を捨てて西方極楽に往いて生れるの義と決定されている。されば我が浄土宗に於ては、列祖に示された往生の意味は未来往生の義なりと、受取るべきである。

○

かく往生は未来であるが、その未来の往生を得るために念仏すれば、その念仏の一念一念にすばらしい御利益を得る。法然上人も一念一無上、十念十無上と仰ったが、たった一念の念仏の中にも一念大利無上功徳と云われる、尊いすばらしい御利益が獲られるのである。それは何故かと云うと、法然上人が選択集に説かれているように「四智三身十力四無畏等の一切の内証の功徳、相好光明説法利生等の一切の外用の功徳、皆悉く阿弥陀仏の名号の中に摂在せり」と仰った如く、阿弥陀仏が因位法蔵菩薩の時に非載永劫の長きにわたって火の中、水の中、苦修練行せられた御苦労によって獲られた一切の善根功徳が、南無阿弥陀仏の六字の名号の中に籠っているからである。されば十悪五逆を犯した大罪人でも、最後臨終の十念一念で救われるというのである。之はただ臨終のみが尊いのではなく、平生でも唱うる一念一念に如来の光明は赫躍と輝き来り、三垢消滅身意柔輭と云って、慾の心は清らかに、腹つ心は悦びに、愚痴の心は明かるく、身も心もやわらかにと、お救い下さるのである。

○

法然上人が禅勝房に示された「いけらば念仏の功つもり、死なば浄土に参りなん、とてもかくてもこの身にはおもいわずらう事ぞなき」というお言葉は、浄土宗義の骨髄を示されたものとして感佩おかざるものであるが、その中の「生けらば念仏の功つもり」の中には、現世の御利益たる三垢消滅、身意柔輭、囲繞護念、延年転寿（長生）等の身心両面にわたる阿弥陀仏の現益を言外に含めた御言葉である。さればこの御言葉は選択集と同じく現当二世の両益を示された浄土宗最高の御法語と拝するのである。

○

故に浄土宗のお念仏には、現在の御利益と未来の御利益との二つあるが、然し正さしく生死解脱を得る鍵は何であるかと云うと、それは未来に得るという「往生」にあることは勿論である。「往生」こそ至上の御利益なのである。

されば法然上人も「我れ浄土宗を立つる心は、凡夫報土に往生することを示さんが為めなり」と云われている。

往生とは梵語では Pratyājāyate であって、荻原雲来博士によれば、或る者と生る、或る処に生る、更に生る、復び生る、生れかわるの義だと云うことである。この訳語の中、或る処に生るとあるは場所の移転の義であり、更に生る、復び生る、生れかわるとは状態の転変の義である。死んでから極楽に生るというのは場所の移転であり、現世に「往生」を得るというのは、状態の転変ということになる。故に往生の原語からいうと、現世に往生を獲ると云っても、別に悪いということはない筈である。現に曇鸞大師や道綽禅師は、往生とは生即無生の義であると解釈して、上品の人は現世に無生を証して往生を得としており、更に下って冏師や酉師は現世に生即無生を証するを、無生而生の往生と云って、現世に往生を立てている。

然し善導大師は浄土教は凡夫本為の宗教であるという前提のもとに、凡夫の身で現世に生即無生を知って往生を得るということは不可能であるとして、往生とはこの肉骨の亡くなった未来に初めて可能であるとして、未来往生の義を釈定されたのである。法然上人、鎮西上人、記主禅師等の列祖も、往生は未来なりとせられたことは前述の如くであるが、往生は未来であっても、その往生が出来るに間違いないという約束は、現世に於て先に可能であるという議論が出ているのである。それがいわゆる業事成弁論である。

○

業事成弁略して業成の語は遠く曇鸞大師や道綽禅師にも出ているが、正さしく臨終平生を論じたのは法然上人を以て初めとするのである。即ち法然上人は「往生の業成就は臨終平生にわたるべし」と云っていられるが、之れによると未来に往生を得るという業事は、平生にも臨終にも成就することは可能であると云うのである。法然上人は建久九年六十六歳にして三昧発得せられて、見仏了々の境地に達せられたということは、正さしく此の業事成弁の境地を得られたということである。鎮西上人も記主禅師もこの業事成弁について論じて、平生にも之を得ることを明していられるが、別して白旗上人はこの業事成弁を定義して「業障滅尽当果無礙」の位を云うとしていられる。業障滅尽当果無礙とは、現在の心垢や過去の業障を凡べて滅し尽くして往生の境地を得、八風吹けども動ぜずという何物にも礙えられない自在の境涯にあるのを云うのである。即ち法然上人は「唱うればここにいながら極楽の聖衆の数に入るぞ嬉

しき」を悦ばれ、親鸞聖人が「有漏の穢身は変らねど心は浄土に住み遊ぶ」と歌われた、そういう境地は凡べて業事成弁の境涯ということが出来ようと思う。

○

この業事成弁の境地は、現世に人間として生きておりながら、既に西方極楽に往生したと同じ心境に住して、世の八風吹きすさぶ逆境の中にも、猶悦んで生きて行ける境涯を云うのである。

法然上人は七十五歳の老齢の時に、松虫鈴虫の事件に連坐して四国の土佐に配流せらるることとなり、弟子や信者の人々も之を悲しみ、暫らく念仏の弘通を内々にせられてその配流を免れさせ給えと諫めたが、上人は「流刑さらにうらみとすべからず、そのゆえは齢すでに八旬にせまりぬ。たとい師弟おなじみやこに住すとも、娑婆の離別ちかきにあるべし。たとい山河をへだつとも浄土の再会何んぞうたがわん。また念仏の興行洛陽にして年ひさし、辺鄙におもむきて田夫野人をすすめん事、年来の本意なり。しかれども時いたらずして素意いまだはたさず、いま事の縁によりて年来の本意をとげん事、すこぶる朝恩というべし」と云って、配流という悲しむべき事を朝恩と感佩されたのであるが、その中にこそ業事成弁せられている元祖の雅懐を見出すのである。

○

善導大師は観経の「若し念仏する者は是れ人中の分陀利華なり」と云へるを、人中の好人、人中の妙好人、人中の上上人、人中の希有人、人中の最勝人なりと釈せられたが、後世我が国に於て念仏の篤信者を妙好人と云っているのは、この善導大師の釈に基くものである。

即ち妙好人とは泥中より咲き出でたる蓮華が、その泥田の泥にも汚されず、清浄なる姿を複郁たる香りを保っている如く、篤信の念仏者は世の五濁にも汚されず、悪世にもめげず、清く正しく悦んで生きてゆけることを示したものである。

○

私が去る昭和廿四年の頃、山口県大島郡安下庄快念寺に門主御親教の五重勧誡に行つた時に、ある戦争未亡人Aさんなる人が、受者の一人になっていた。Aさんは五人の幼少なる子供を残して戦死した夫君を偲んで切々たる哀愁を綴った詩集を物していられた。その一節に

鳴呼柱とも頼みし我が夫君
今次東亜の戦いについに空しくなり玉う。
呼べと帰らぬ君なれど

我は心に叫ぶなり。

なぜかく早く逝かれしぞ
いまだ幼き五人の子等を残して
現し世に　父のつとめはなほ半ば
残れるものを　術べもなし
ああ世の風の吹き荒るる
中にはぐれし　母と子の
かよわき鳥よ　片羽鳥
この荒波を乗り切りて
彼岸に着くは　いつの日ぞ

と切々たるものであった。私は五日間にわたって五重の要義を勧誡して帰寺したのであるが、のちAさんから次の如き書信を頂いた。

私は夫が戦死してから幼少なる五人の子供を抱いて、毎日々々じめじめしたわびしき日送りをしていました。然るに今回知恩院の管長さまの御親教の五重があるというので、夫の追善のためにと思って入会させて頂きました。所が計らずも日々あなたさまの御説教を承ると、ただ死者の追善ということでなく、私共生ける者の日々生きゆく道を示されまして、誠に有難いことでございました。暗い胸の内は明るくなり、切ない思いは安らかな気持となり、こんな尊い世界があったのかと、今更の如く驚いたのであります。

お念仏していると、清らかな喜ばしい明るい心となって、此の世ながら極楽浄土にいるような気がいたします。今までは一寸したことにも恐れおののき悲しんだ私でしたが、今は苦しいこと、難儀なことに遭うと、私を鍛えて下さるんだと却って嬉しくなって参りました。之もあなたさまの御勧誡の御陰でございます。最後に私の胸の内を一首の歌にしてお礼に代えさせて頂きたいと思います。

み教を胸にいだきて進まなん
世の浮波を悦びとして

とありましたが、このAさんは夫に戦死され、五人の幼少な子供を抱いてのやるせなき悲しみも、五重相伝に入り念仏するようになってから、その悲しみから離れて敢然と苦難の中に悦んで行ける力を獲られたのでありました。之れこそ無量寿経の「三垢消滅身意柔輭、歓喜踊躍善心生焉」の御利益であり、また往生を既に獲たる業事成弁の境地と思うのであります。

御法語をいただく

念仏して往生するに不足なしといひて、悪業をもはばからず、行ずべき慈悲をも行ぜず、念仏をもはげまさざらん事は、仏教のおきてに相違する也。たとへば父母の慈悲は、よき子をもあしき子をもはぐくめども、よき子をばよろこび、あしき子をばなげくがごとし。仏は一切衆生をあわれみてよきをも、あしきをもわたし給へども、善人をみてはよろこび、悪人をみてはかなしみ給える也。よき地によき種をまかんがごとし。かまへて善人にしてしかも念仏を修すべし。是を真実に仏教にしたがふものといふ也。

（念仏往生義）

新聞の社会面は全く目を覆いたくなります。毎日そこに報ぜられる事件は殺人、盗難火災そして交通事故を除けば何があるでしょうか。非行少年の数は増える一方であり、しかも悪質になってゆくそうであります。一体これはどうしたわけでしょうか。

権利と義務の関係も、自由と規律の関係も車の両輪のようなものです。片方だけでは存在し得ないものであります。しかし実際にあってはこの両輪が跛なのではないでしょうか。

こんな事態となった原因に、教育界の意見不統一をあげることができます。一方で道徳教育が必要だといわれ、他方では前時代的規律に過ぎないものは必要ないといいます。こんな議論ばかりしていて、生活に一つの規準が確立されるのでなければ、反省しろといっても無理でしょう。

念仏を申せば十悪五逆といった極悪の人であっても往生できます。しかし十悪五逆のままであってよいということではありません。つまり悪から遠ざかり、善に近づくように努力することは、信仰する者なら人間として当然の成りゆきです。必ず善に近づく気持をもちながらお念仏を申せということは、本願を信じるとか信じないとかの問題より先だつ問題であります。

反省して自分はまだ善に近づく努力が足りないから悪人であると自覚するのと、現実に悪事を行う悪人とは本質的に違います。こういえば当然のことに過ぎないのに、これが努力なしにはなし得ないことであります。

仏さまの慈悲は智者だから愚者だからといった区別をしたりしませんが、善人を悦び悪人を悲しむというお言葉を味いたいと思います。

敢えて危機と言う

—現代仏教の批判と反省—

（大正大学講師）
安居香山

☆

現代仏教への批判は決して事新らしいことではない。しかもこれが、今更のように取りあげられ、その反省が要求されるわけは、何としても過激な新興宗教の出現が、大きな契機を為していると言わねばならない。そして卒直に言って、現代仏教は、大きな危機を迎えていると言っても過言でない。しかし私は、こうした宗教の出現に驚き、現代仏教の将来を危惧しているわけではない。問題は、現代仏教が批判と反省のチヤンスを与えられたこの時に於ても、尚且つこうした問題を対岸の火災視して、個人的にも、組織的にも何の反省もせぬその安易さに危惧を感じているのである。敢えて危機ということは、こうした安易さに対する警鐘であり、批判である。これに関連する問題は余りに多い。私の考えるところの一端を述べてみたい。

☆

今や彼等は三百六十万世帯を呼号し、今尚おその止まるところを知らない。同じく仏教徒と称しながら、自己の信仰のみを絶対とし、他は一切邪教なりとするその独善的排他性は、若し彼等もまた一応仏教徒と認めるならば、誠に獅子身

中の虫と言わねばならない。今ここで、私が問題としようとする事は、そうした彼等の教えなるものが、果して真に仏教なりや否やという事ではない。そうした事を論ずるには、又別に適任者が多くいよう。私が問題としたい事は、極めて現実主義的な、迷信にも近いような彼等の主張に、かくも多くの人々が引きつけられ、熱狂するというその現実についてである。しかも、その多くの人々は、且ってはわれわれの傘下に属し、われわれの信徒と思っていた人々なのである。そして、更に問題とすべきことは、こうした現定にも拘らず、多くの仏教徒達がこの事実を直視し、これに対する何等の対策も立てず、ただ徒らに、従来の因襲の中に安住せんとする、その無反省さについてである。

この事は、決して、今、慌てて、こうした宗教に敵対し、これに対する対策を立てようということではない。そした事も必要であるが、それよりも先にこうした現実が来たというその根本原因が奈辺にあるかを、この際、卒直に反省せねばならぬということに外ならない。そして、多くの人々が、既成仏教から離れて行くその根本原因を求めるならば、決してこうした宗教が出てきた為ではなく、現代仏教そのものに問題があったという事である。こうした現実が到来したという事は、過激なこの宗教が跋扈する以前の問題なのである。逆にいうならば、現代仏教の因襲然とした現実がこうした宗教をして、跋扈せしめたと言ってよいであろう。然らば現代仏教の現実とは、如何なることであるか。

☆

それには勿論いろいろあろうが何としても、大きな問題は檀家制度というその事である。これは、家を中心とした封建制度の遺産であるが、現代仏教には、今尚おそれは大きな力である。何故なれば、これある故に信徒を寺に集め、これを教化し、これある故に寺はその経済的支元を得るからである。しかしながら、又これある故に、現代仏教は安易に流れ、これ故に堕弱となった。信徒もまた、これある故に自分も宗教ありと錯覚し、因襲的な継がりの中でのみ仏教に属し、仏教本来のものは失われてしまっているのである。今や、総てにおいて個人が優先するこの時代にあって、この制度のみが厳然として残存する事は、誠に結構とするも、これあるが故に、現代仏教は大きな危機を迎えた事を自覚せねばならない。敗戦を契機として、殆んどの機構が力ずくで破壊されたとき、これのみが残存し得たという事は、信教の自由を立て前としたものと言うものの、誠に不思議といわねばならない。その残存は現代仏教に功罪相半ばしたと言うならば、余

りにもわれわれの責任を他に転荷したこととなるであろうか。若し、敗戦を契機として、この制度が打破されていたならば、確かに現代仏教は大きな変化を来していたに違いない。しかも、それ故に、現代仏教は決して凋落の時を迎えていなかったに違いない。むしろ、今の如き過激宗教の跋扈も許すが如き現状は無く、むしろ新しい展開を示していたに違いない。

☆

戦後多く出てきた新興宗教は、その教えの正邪は別として、すべて人対人の教化を以て進出してきた。それだけに激しさもあったが、又信仰で結ばれたという強烈さがあった。そして、既成の諸仏教も、すべてその当初においては、すべてそうであった筈である。三百六十万世帯を呼号する彼等も、すべて一対一の折伏で勝ち得た集団に外ならない。

ここに至るとき、われわれは、先ずその本来に立ち返り、徒らに制度に依存せず一対一の世界に立ちもどらねばならない。現実主義的な浅薄なる信仰を以てさえ、あれ程に人々を集攬し得たのである。われわれの高遠な長い歴史の中で鍛えあげられてきたこの信仰が、人を引きつけ得ぬわけがないではないか。身を以てする信心の布教こそ、この危機打開の唯一の道である事を知らねばならない。まことに、問題の解決は簡にして明である。われわれは謙えそれが、極めて些細な事と雖も、その些細な実践の中に、一つの成果のあることを信じなければならない。

ともすると、葬祭をことごとする事を以て賤職視し、これを以て、堕落なりと考えるものがある。大変なあやまりである。葬祭することは、誠に尊い聖職である。しかしながらわれわれは、この事にのみ止まっていてはならない。そこにのみ止まる故に賤職視と堕落があるのである。その中にも一つの教化を加え、その中にも一対一の対決があるべきである。

今や、われわれは、足元に大きな試練を受けようとしている。この現実を過小評価してはならない。漸く上の組織も、こうした危機をみつめ、事局対策と銘打って乗り出して来た。誠に結構と言わねばならない。しかしながら、単にそれが、組織に止まり、上部機構のから廻りとなってはならない。その組織の中に居る一人一人の自覚と反省となってこそ、その機構の力は発揮されるというべきである。

危機は近くにある。この時にしてこの危機の自覚と反省なきときは、仏法は亡びずとも現代仏教は忘却の彼方に捨て去られて行くことであろう。

仏教教団の人々へ

—大胆な脱皮と前進—

白幡憲佑
（中外日報社神奈川支局長）

かみ手に老松の鉢が置かれ、金箔の襖がしずかに開いて大僧正がお出ましになる。「本日のご研究、ご研修ご苦労さま、よろしく」数十人の黒衣の僧侶達が平伏し、念仏の声のうちに再び把り手の朱の房がゆれて大僧正は襖の奥へ去る。ここでチョンと木の音が入って幕となる。これは、ある芝居の一幕としても若しこの演しものの題名が「現代の教化活動は如何にあるべきか」とあったら、大方の観客は「ああ江戸時代の坊さんの生活だな」と合点してしまうだろう。ところが現在の仏教々団の行事に折々みられる場面なのだと説明したら一般社会人達は、その題名と展開される所作とのアンバランスの不思議さをどのように受けとることだろうか。私は皮肉を云ったり、チヤカしたりする気持は毛頭ない。この大時代的な雰囲気の中で現代へ脱皮しようと苦転する姿が仏教々団の現状ではなかろうか。

〃仏教の近代化〃〃現代の教化活動〃〃教団の再組織〃etc これらの至上命令はすでにマヒする程、叫ばれてきたし、教団もそれなりに努力を続けているが、成果はあがらないとの声は大きい。

寺檀関係の強化策として真宗大谷派の同朋会運動、本願寺派の門信徒会づくり、曹洞宗の一ケ寺一護持会などを皮切りに浄土宗でも知恩院護持会運動と教団再組織が数年来の仏教界の中心的な動きとなってきた。殊に信徒づくりが上手で、その組織も他の仏教々団に比べて強化だと定評のあった真宗が七百年遠忌の直後にこの運動に着手したこと

は注目にあたいする。大谷派は〝訓覇の前に訓覇なし、訓覇の後に訓覇なし〟の讃辞を受ける訓覇信雄宗務総長が宗政家としての生命を賭しての同朋会運動だが、大綱領と緻密な施策が発表されてから既に二年。真人社グループのチヤンピオンをしても若し如実な成果がみられないとしたら、その原因はどこにあるのだろう。これは一宗団の問題ではない、全仏教界共通の難問題となってくるだろう。

仏教宗団の苦慮している信徒組織化は創価学会や立正佼正会の組織の模倣を目指しているのではなかろうか、進歩的仏教人と称する人々は檀家制度を、徳川時代の悪遺物と評し、仏教の今日的衰退の遠因とかたずけてしまうが、檀家制度は決して仏教復興の癌とはなっていない。むしろ、この制度の利用、運営の方法を教団、僧侶が怠り、知らなかったが為に枯渇させたのではなかろうか、例えその当初は悪因からであろうとも善果として〝機会を利用〟しなければならない。創価学会の折伏は勿論、新宗教の狙いは家ぐるみの入会である。単に家族制度の崩壊などと表面上の流れにながされて既成仏教々団が独自にもってきた檀家制度の解消こそが仏教復興の大要素だ、などと云ったら新宗教の連中は、さぞやホクソ笑むことだろう。そこで考えなければならない事は、信徒づくりの方策が果して、現在の社会や民衆から要望されている点にそっているのか、否かである。人心や社会要求と遊離した施策は空転に過ぎない。経済界の競争は常に激しい、〝消費者は王様〟の言葉を卒直に経営者が受け取ったところにモニター、経営カウンセラーの登場が目立つようになったのである。人心や社会生活と密接に結ぶところに価値をもつ仏教界が果して、卒直に各階層の人々の声に耳をかたむけた事があろうか。大胆に信仰モニター、カウンセラーをうみ出したらどうだろう。各寺の各階層の声をその寺に反映し、大きく宗団に影響させたならば、教化方法もいくらか現実的なものになってきはしないか、このような地に足をつけての動きが信徒の組織化となってくるのであろう。

宗務所の奥で、本山の一室で僧侶のみの視野でつくり出されるプランが地域社会の異なりを超越して受け入れられると考えたらナンセンスも甚しい。

各宗団は信徒組織化のまえに、それを指導していく僧侶や宗団の体質改善を目指すのが前提だろう。旧態と封建の悪風の中から流れる笛の音では新らしい音楽も舞踊も創造されない、いわんや人々は踊りのテンポに苦しむだけである。

一般社会人からの信仰モニター、カウンセラーの登場と

共に現存の〝坊さん宗会〟を廃止したら、いかなるものか、小田原評定や自意識過定のやりとりだけで、結果と実行が生み出されないならば、各寺の宗団意識の喪失に拍車をかけるだけに過ぎない。宗団の運営はその信徒である各界に生きる人々に委ね、僧侶は運営に参画はするが、布教々化と自身の向上に第一義を置かせるべきである。僧侶ほど名利意識の強い存在はないと云う。せめて自分の宗団の中だけでも、何かの役職について……と云う自己の内容を度外視した輩が集った時に宗団は現実の生きた信仰指導の集りではなくなり、特殊社会と随してしまうのである。もっとも一部の宗政人には、その識見、力量ともに敬意を表すべき人々もいるが、他の大部分は、名利の輩であると表現しても、さしつかえがなかろう。

とも角、教学や布教を度外視して宗政家が宗団の最高権威者であるかの如き醋覚を払底させるべきである。村会議員クラスの政治力で、何んで社会全域を指導する宗団が運営することが出来るのか。宗政に志すならば、せめて国会議員程度の政治勉強をしてもらいたい。いやいやそんな事より僧侶自身の本体に還るべきだろう。

ところで、仏教会界の近代化と云うと、直ちに経典の現代語訳、音楽法要、服装云云と語られるのが常である。おおいに結好なことばかりである。だが、近代化と云っても宗教本来の持つ特質と意義や地域差を忘れてはミイラ取りがミイラになって、近代化が仏教自体の終点となってしまいかねない。例えば、戦後数年をへた頃、すぐれた識見をもった一仏教人が、宗団から飛び出して全く新らしい組織と形態の寺院活動を創造して世評を集めたが、これをそのまま東北地方の或る僧侶がマネて、従来の寺檀関係も勤行の在り方も捨て去って、これこそ新時代の仏教だと意気込んだが、その寺は悪評と冷笑のうちに空中分解してしまった。この新運動も前者の仏教人なればこそ完成できたので誰もがそのまま成功に持ち込むことは不可能なことであった。と同様に音楽法要も現代語訳の経典による法要儀式も必要なことだが、それを取り入れる時期と環境を慎重に考へるべきである。仏教の教学、布教伝道の在り方がどのように近代化されても、その活用方法は飽くまでも一寺一色といった多角的なものになるべきだろう。

現在の仏教宗団の課題は大胆な脱皮であると共に緻密な裏付けをもつ方策と、大きな広い視野の養成と云った宗団内の体質改善、近代化の誤りなき取捨選択である。これらがなされる動きと共に信仰は再び人々の心によみがえってくる事を知るべきであろう。

仏教へのねがい

大江靜子

☆

戦前、故郷の家には仏間があった。黒くくすんだ柱と、茶けた襖のその部屋には燻された金色の大きな仏檀が床の間に並んで置かれていた。そこはいつも、少し湿った畳のにおいと供えた果物の熟れたそれとが線香の香に混りあって静かに沈んでいた。メ切られた襖は子供心に神秘的な隠された何かがある様なマカ不思議な世界に思はれた。朝夕に祖母が唱えるお経は呪文に似ていたし、火の型を背負った仏像はお祭でみた地獄絵の恐さを連想させた。父も母も熱心な仏教徒であり、私も問われれば仏教徒であろう。しかし私はそう答えるのに少々赤面し、戸迷いを禁じ得ない。何故ならば私には確信がない。仏教そのものの本質を私自身の宗教のカテゴリーの中に信仰という言バの持つ絶対性でみつけ出せるかどうか疑問なのだ。この不確実さは一体何であろう？　分折してみればそれは仏教への無知である。習慣による祖先への祈りは、素朴な信仰の表現であるが「南無阿弥陀仏」という言バの本当の意味すらよく知らない。仏とは死者であると私は単純にその因果関係の結びつきを肯定していた。仏教とは仏に基因する宗教であり、僧侶は死者と生存者の媒介役として存在するという定義がいつの間にか私の仏教への概念となっていた。

☆

幼い頃からあの薄暗い仏間が開かれるのは盆と彼岸と過去の人々の冥日でしかなかったし、朝夕の供物は他界した祖父母にと捧げられ、母の教へた祈りの言バは祖先へのものであり、仏とはその人々であった。仏教の一般的解釈が死者を通してしかなされない日常の家庭生活にあっては、そうした観念も無理ではなかったろう。難解な仏典、経文からは如何としても釈迦の教へは伝って来ない。一体多くの日本人のパー

センテージで示された仏教徒の中にその認識が私以上である人々の教は、どれ程でもあるまい。その多くは祖先との結びつきにおいてのみ仏教を感じているのにすぎないのではなかろうか。私の今日までに得たる程度の仏教への知識、それはほんのかすかな輪郭にすぎないが、それ等はほとんとが文学書からのものであった。よく墓参の折など寺の本堂にも参り住職とお会する機会も多かったが、ついぞ一度も仏教についてその教えについて語られた事はなかった。仏檀の引出しに何冊かの経文がたたまれていたが、とり出してみる度にむつかしい漢字の羅列にただ目を走らせるだけで終ってしまった。積極的にその本質を知ろうとする努力もなしに毎日が明け暮れた。仏教の持つ無情感は現代の騒音中の孤独とふとふれ合う時はあってもたしかな裏付のない信仰はそこに救いをもたらさない。悟りに程遠い俗世界の埃の中のあきらめはやもすると頽廃を生み心の迷いは、コンクリートの冷さには耐えられない。暮色の中の仏間で無念の境地であろうか。一心に読経する祖母のかがんだ背の丸みを思い出しながらしかしあれは現代には適用しないと信仰の浅い私はそれを納得出来ない。生活の基礎の上に現代の合理性を裏付にした、魅力のある信仰が人々の心をとらえない以上、仏教はある過渡期に立たされているのではないだろうか。歴史と伝統の中の宗教として安閑としている時代は過ぎた。多くの新興宗教の勃興、これはあきらかに既成宗教への排戦である。彼等の武器は社会の底辺にある。信徒を組織づけ信仰の度合による昇格を現代的な出世感に結びつけ政治力の背景をうながして完全宗教への道をかちとろうとしている。教への内容は既成仏教の転売にすぎないが、生活のアカにまみれた多くの人々の心のとらえ方は巧妙である。

☆

私はここで現代仏教がもっとうすくなれと主張しているのではない。死して極楽浄土に行けるためのものではなく幸福な家庭生活のつぶさに仏の教へがあるという事を社会を通じて現代的な科学性を加味して布教する事が先決ではなかろうか。そのためには単に抹香臭い葬式仏教から逸脱して、「陽」な感覚的に新しい仏教を造りあげていくで事はないだろうか。欧米において子供達の家庭生活のしつけの基礎となるものは宗教であるという。道徳教育が云々され失はれた公徳心について世論がいきまいている今、政治色のない仏教がその担い手になるべきではなかろうか。家庭をもち、二人の子の母となって考えるのはこの子供達に仏教徒としての誇りと確信のある信仰生活を送らせたいという事である。

一冊の聖書

山田久男

○

かなり以前のことであるが、次のような外国の映画があった。

ある客船が、航海の途中、暴風雨にあって坐礁し難破する。船客の大半の生死はどうなったかわわらないが、一人の少年と一人の少女が、海上を漂流し、幸いにも、偶然ある無人島に流れ着く。二人の子供は、故郷に帰るすべもなく、その無人島で、自給自足の生活を始める。来る日も来る日も島の付近を通る船影を求めつつ年月を送る。二人の子供は互に励まし合い、次第に成長してゆく。そしていつしか、互に異性であることを認識し合う年頃となる。

この二人の間に一冊のバイブルがあった。このバイブルは、船が難破したときに島岸に流れ着いたものであった。二人はバイブルを開いて、男女は寝室を別にしなければならないことを話し合い、その通り実行する。（実際にバイブルにそういうことが書かれているかどうかは知らない。二人の会話がユーモラスで客席から笑声が起った。）

しかし孤島に二人だけで暮す男と女である。やがて自然に二人の間に恋心が芽生え、またそこで二人は、バイブルを開いて、結婚ということがどういうことであるかということについて語り合い、バイブルの記述に従って。二人は結ばれる。こうして新らしい二人の生活が続き子供も生れる。すると、ある日青年が、島の沖を通る船影を見つける。一家はその船に乗って故国に帰ってゆく。

この映画は、勿論、とくに宗教的な意図を持って作られたものではない。二人の子供が無人島で、肉体的に精神的に成長してゆく過程を、美しい南海の自然の風影を背影に描き、あるときは、島の探検にスリルを味わせるといったストーリーの極めて平凡な劇映画である。

ただ、この映画で興味を持ったことは。一冊のバイブルが劇の主役的な役割を占めていることである。バイブルのおしえが、文明から隔絶された絶海の孤島での人間の成長してゆく過程において、精神的な拠所となってい

ることには深く感銘した。バイブルのおしえが生活の倫理的原理となっている。この映画は、それをなにげなく語っている。

○

現代仏教について何か書けと云われて、私は、ふと、この映画が頭に浮んできた。

今の仏教にこういう子供の精神的な拠所となっている面があるだろうか、人間形成の場において、仏教の思想が生かされているだろうか、ということをこの映画と関連して考えてみた。私は仏教についても、キリスト教に関しても専門的な知識は持っていない。また仏教とキリスト教と比較して、キリスト教の方が優れているとは、もとより考えていない。しかし、こういう実践的な要素は、今の仏教には希薄なのではないだろうか。

勿論、これは映画であって作られた話であるが、バイブルが、こうした扱い方をされるということは、逆に見れば、バイブルのおしえが常識的な生活感情の中に無意識に生きているからであろう。

○

先日、知友の警察官と世間話をした。そのとき、その警察官が、次のように云っていた。「最近少年の不良化が著しく増加してきた。これは、結局、少年時代の精神的な指導機関がないことに原因がある。一番いいのは、個々の家庭で道徳的な観念を育ててゆくように指導することだが、近頃は家庭では、あまりそういうことはしていないようだ。では、学校ではどうかというと、全くしていないと云うのではないが、学校では日教組などとの問題もあって技術的になかなかむずかしいらしい。家庭に望んでだめ、学校に望んでも期待が薄い。といって、警察で、巡廻用のバスでも出して巡廻して、強制的にお説教してまわるわけにもいかない。そんなことで効果の得られるべき問題でもない。これは、結局、宗教の力に期待するのが一番いいと思う。」とこのように語った。

私もこれには同感だった。と同時に今さら改めて、望むというよりは、すでに、何らかの形で働きかけていなければならなかったことと考える。

○

仏教にもキリスト教にも服役者のための教誨師というものはいると聞く。しかし、それは罪を犯した云わば特殊な人間のために必要なものであり、要はそうなる以前の問題である。そういう人間を出さないために仏教が働きかけなければならないのだ。悪に落ちた人間を教誨するよりも前に必要なことは、そういう人間を出さないように人間的な指導をしなければならないのだ。

子供が成長してゆく過程に仏教を生かそうとすると、具体的にはどういう方法を取ったらよいか、実際には極めてむずかしいことには違いない。しかし現代でもなお依然として、仏教の影響が、日本人の風俗、習慣の中に浸透していると聞く。したがって何らかの方法があるのではないだろうか。仏教の専門家に考慮していただくことを一言提言する。

〔座　談　会〕

現代の青年は仏教をいかに見また何を考えているか

一、仏教には無関心

司会　今日は皆さんから、現代仏教に対するキタンの無い意見を伺うと共に、又、現代青年の一人としてどういうことを考え　又、どんな問題があるかということをお聞きしたいと思います。

最初に、現代仏教に対してどう考えているかをお話し頂きたい。

A　全然関心がありません。まア　何も知らないと言った方があたっていますね。

司会　関心がないということは必要がないということですか。

A　まア　だいたいそういうことですね。

B　関心のないことは、まア、最たるものですね（笑）第一、家には仏壇もないし　葬式も出したことはないし、はっきりと形にあらわれた仏教を知りません。

その意味では必要が無かったと言えます。

勿論　全然無関心とは言えません。例えば最近新聞などで見る南ヴエトナム事件などがそれです。

しかし　仏教それ自体に対しては興味も関心もないですね。

C　私は　クリスチャンですから、仏教は悪魔的なものだと思って居ります。しかし、宗教に関心がないと、外の人は言いますが、それはどうですかね。

司会　君達に興味と関心がないことは別としても、現に、仏教が厳然として日本にあり、君達もいろいろな形で見ているのですから、それについてどう考えて居るか伺いましょう。

A　あることは確かですね、しかし、若い者とは関係が無いんじゃないですか。働きかけがなく、ただ歴史として残っているだけじゃないのですか。

司会　働らきかけが無いということは、確かだと思うが、しかし、全然ない訳ではない。現に、仏教青年会というのもあるんだから。ただ働きかけの範囲が狭いのかもしれないね。中村君の場合の入信の動機はどんなだったのですか。

C　私は、妹から勧められて教会に行きました。はじめは知識欲もあって面白かったん

ですが、説教もすぐ底をつきましたね。この頃、自分で、或る伝道者と一緒に聖書研究をやるようになって始めて深い関心をもつようになりました。

司会　中村君の場合は、確かにチャンスがあった神だね、寺などには　若者を魅きつけられるものがなく、チャンスも非常に少いということが言えるんじゃないかな。特に若い人との場合はね。入っていけばそれなりのものもあると思んだがね。

それじゃ　坊さんということになるとどういうことになるだろう。

B　私の身近にも若い坊さんがいますが、何も宗教的なものを感じさせませんね。

A　単に伝統というものを守っているに過ぎませんね。形式的になっているんじゃないかな。

C　私はこの間京都のある寺に泊ったのですが。いい坊さんでした。たしかに　個々の人間としてではいい坊さんでした。

そこにも若い人が居ましたが　そういう人は仏教を見るチャンスは相当あるんじゃないですか。

司会　たしかに　全国に寺が随分あるにしても、青年に機会を与えるのが少いですね。

二、宗教は青年に必要か

司会　少し問題をかえて、一般論として宗教は青年に必要なのかどうだろうか。

D　私はヘソまがりかもしれないが、必要とか必要でないとか考えることが馬鹿らしいんですヨ。興味もないものに必要も必要もないもないですよ（笑）

司会　しかし、興味がないということと、必要が無いということとは、別の議論じゃないのか、君自身必要が無いということは、青年一般にも必要がないと考えているのか。

D　いや、そこまではわかりませんね、第一　必要がないから考えたこともありませんね。（笑）

A　全然必要が無いとは思いませんね。やはり本のひとつも読みたいと思いますからね。単に知識欲としてのみにとどまるのかもしれないが。

B　私自身宗教というものがどういうことか解りませんが。具体的に言えば、何々教、何々宗と言うんでしょうか。そういうものが必要かどうかは疑問ですね。まア、余り考えたこともありません。むしろ、仏教芸術というものに興味を感じますね。ここにクリスチャンの方が居ますが、私自身、ああした気持にどうしてなれるのか不思議に思います。勿論、内容を知らないんだから、と言ってしまえばそれまでですが……

C　私は宗教とは　奉仕するもの、と思っています。対象があるなら奉仕する必要があ

出席者（発言順）

小野　勝（東京教育大学三年）
原　洋（東京教育大学三年）
中村雅一（東京大学三年クリスト教信者）
新倉秀樹（予備校在学中）

司会　編集部

ると思います。おやじがいるのを否定する訳にはいきませんからね。（笑）

A　奉仕というけど、私などは、宗教は自己修養だと思っているんだけどなア

D　私は、トルストイのクロイツェル、ソナタを読んだんだが、その終りに、クリスト教の宣伝のようなものが出てきたのですが、そのようなものなら認めてもいいと思いましたね、しかし宗教を他人に強要するというのは面白くないですね。

C　それはおかしいんじゃないですか。クリスト教の立場では、自己修養という立場ではなしに、やはり楽園を求めるということにあるんですから。そういういいものがあるとすれば、知らない人に伝え勧めるのが当然ではないでしょうか。勿論、嫌だという人に勧めるのはどうかと思いますがね（笑）

司会　クリスト教と仏教とは必ずしも同じではないが、しかし、終極的には宗教としてそれ程違ったものだと思っていないんだがね。私としては、やはり青年に宗教は必要だと思っている。最近、文部省あたりでも高校教育に宗教哲学を入れるということが問題になっているのは、そういうあらわれではないのか昔の若い人は、もっと哲学的なものや宗教的なものを考えたり、求めたりしたものだと思うがな？

A　我々にはそういうものを求めたり、考えたりする暇がないのですね。こんなに世の中が忙しくなってくると、現実の中で電車に乗り遅れないようにするだけですよ。

C　それじゃ、何の為に生きていくのかわからなくなるのじゃないかな。墓をたてる為に一生働らいたということになりませんか。

B　私は深夜放送なんかで、宗教放送なんかをよく聞くのですが、何か説く人が神のような立場にたって、宗教的な諦観というものを持っていて、ある考え方がすぐそこで止ってしまうと思うんです。たとえば、私がおふくろを好きだということは、それなりに徹底的に好きでいいんじゃないですか。それを何も、宗教の愛に結びつける必要はないと思うのです。死の問題も同じです。

司会　君達の議論を聞いていると、知らないからというのが大きな原因となっている。たとえ、一つの知識としても、仏典やヴァイブルを読んだ上での議論なら、又変ってくると思う、そうした時に、はたして無関心でいられるかどうか。その意味では君達にはまだ無関心の所までいっていないのじゃないか、しかし、それが現代の青年の実体であるとすれば、そうしたことが問題とされる訳だが、

D　そうとは言えませんよ。私などは、少し知っても、そんなものには無関心でいられます。（笑）自分の信じていることを他人におしつけるだけの宗教では、私は反発したくなりますね。

司会　先程、死ということがでたが、死の問題はどう考えていますか。

A　死んだら終りだと思いますね。宗教だって死んだ後を考えるより、生きているうちのことを考えるのが本当なんじゃないんですか。

司会　死の問題を通して現実を考えねばならぬと思うのだが、その点は。

A　そりゃア考えますよ。

B　私などは身近に死を経験したことがないので考えたことはありませんね。しかし、直面してみれば何か考えてみるかも知れませ

んね。

D　私は、死ということについては、瞬間的には毎日考えています。しかし生れる前がどうだかわからないんだから死んだ後なんてわかりっこないですよ。（笑）

司会　瞬間的に出てきた死の問題と、悩みとか恐怖とかは別問題ですか。

D　一時は恐怖もありましたが　死んだら何もわからないんですから、この頃は別にどうも考えませんね。

三、青年は日常生活で何を問題としているか

司会　話は変りますが、今の青年として日常生活における関心事一番の問題は何でしょう。

A　まア　人によっていろいろあるでしょうが、私としては、一番金が欲しいと思います、（笑）現実の生活ですね。

B　私の場合は将来教師になることになるのでしょうが、どんな教師になれるだろうかということですね。

C　私はちょっと変っていますが、クリスチャンとして　神を喜ばす為にはどうしたらよいかを考えてしまいますね。

D　私は、勿論、私なりにこうした一生を送りたいと思っては居りますが。ここで発表してもしかたがないと思います。

C　今の私達には、一晩酒を飲みあかして人生の問題を語り明かすなどということは夢みたいなことで、人生の話をすることなどまずないですね。

A　僕は　宗教的な隣人愛とか、人間の性は善であることを認めるのだが、人間生れたからにはよく生きたい。そのためには政治をよくすることが必要だと思います。歴史をふり返って宗教は人間を幸福にできただろうか。政治を改革することから人間の幸福がもたらされるのだと思いますね。

C　上にたつ人がよい政治をすれば人民は幸福でしょう。でも本当の幸福はこの世ではなく宗教の世界に求められるのではないかと思いますね。

A　しかし僕はそれは納得はゆかんな。人間即ち神だと思いますね。キリストは人間救済のための方法をたてたのであって神と人間とにわけて考えるのはおかしい。人間が人間の生活をよくするのであって、神がどうこうするってことではないと思いますよ。

D　僕は神はいてもいなくてもよいです。神がいると人は束縛をうけますよ。（笑）自分の行動を支配されていると思うと恐しいから考えたくないですね。

司会　政治と宗教の問題はどうだろう。例えば創価学会のような……

B　あれは政治団体じゃないんですか。

C　創価学会についてはよく知りませんが、とても熱心ですね。私の立場からは「サタンも力をふるっている」ですが。（笑）

A　創価学会に入っている人は、社会的に身分の低い人達で、入る動機は現実的悩みにこたえてくれるからというんですね。そのへんで高いところにある仏教が考えなければならない点があるのではないのですか。

四、現代の仏教に何を望むか

司会　ところで君達は現代の仏教にどうあってほしいと思いますか。

B　例えば、哲学的にものを考えるとか、

説教をして人に教えるとか、葬式や墓参を通して故人をしのぶとか、いろいろな形があると思うんだが、僕は最後の点をもっと親しみやすいものにしたらと思いますね。

A　お経をあげたり、葬式のみでいいですね。布教することはいらないでしょう。

司会　坊さんはどうあるべきかな。

B　坊さんが社会的にのり出してきた場合あまりよい影響は、ありませんよ。社会的に活躍するのは限界があると思いますね。やはり葬祭を扱うことになってしまうかなあ。

A　キリスト教にくらべると仏教には古くささがあります。だから結婚式などはどうせやるなら教会でという人が多いですね。

B　古くささといえば例えば、経の読み方の速度とか寺のつくりが古くさい印象を与えますね。

C　教えにしても人間に力を与えていないと思いますね。

A　古くささを突っこんでゆけばそこに問題があると思いますね。

B　近ごろは、生活をムードで占める部面が多いけど、その場合仏教はそぐわないんですね。むしろ僕は宗教に対しては一種の恐怖感をもっているんだが。

司会　ところで君達の家の宗教は仏教だと思うが、葬式はどうするつもりですか。

A　やはり社会的慣習に従って葬式を出すでしょうね。

B　そうですね。

C　僕はもっと自分の考えが確かなものになるまでは考えないことにしています。

D　死んだあとまで考えませんよ。殆んどの人がそう考えてると僕は思いますがね。

司会　まだいろいろと問題もあると思いますが、長い間、有難うございました。

全仏時局対策協議会

（金剛秀一委員長）では、このほど左の題目の印刷物を発行した。右協議会では全国各宗寺院及び信徒の御一読をのぞんでいる。

新刊紹介

創価学会の批判的解明

担当事幹　竹中信常
〃　安居香山

本書は創価学会の実体調査に基づいて創価学会の現況とその教義を解剖し厳しく批判している。各寺院において御一読することにより学会に対する認識を一層深めると共に、これに対するあらゆる不安は一掃されるだろう。（¥一五〇　〒五〇）

寺院の新しい社会教育活動

担当委員　伊藤道機

現下わが仏教界寺院の布教化、社会活動面の実体調査に基づき、近代社会における寺院活動のポイントを指摘しており、各寺院においては大いなる示唆が与えられることになろう。（¥一〇〇〒四〇）

以上ずれも実費頒布。

お申込みは左記へ

法然上人鑽仰会

未顕真実

渋谷賢応
（諏訪仏教会副理事長）

創価学会青年部による、諏訪浄土宗寺院への寺折伏は、前回のような次第で、一月三十日より二回に亘って行なわれたのであるが、そのうちに私の方でも組寺の月一回の集りの際に色々と話し合い、ただ単に情報の研究のみでなく、既に発刊せられている書物の紹介やら、地方選挙を前にした学会の理念等も討議して見ていた。

ほどなく畏友の安居君より「第三文明の宗教」がとどけられ、安居君が実際に高瀬氏とともに、学会の体験をされたことが分ったので、諏訪仏教会や私の寺で一般檀信徒にお話をお願いし、多大の感銘を受けた。

四月五日、私の心光寺、六日、隣寺の紫雲寺、七日、正光寺とまわっていただく事にした。勿論このつどいは、寺で春秋行なわれる法要をかねての事であった。

五日の私の寺の法要には、隣寺の紫雲寺住職窪田史澄上人も随喜していただく事になっていたのでお待ちしていると早々に見えられて、昨夜学会青年部が折伏に来たと言うことであった。

「どんなでしたか。」

「今度は方面をかえて未顕真実一点ばりで来ました。」

「それで」

「私も法要を目の前にしていそがしいときでしたが、私の出て行く前に家内が、〝あなた方は他人の家を訪問するのにその家の都合も聞かずに、どやどやと大勢で入りこんで来て失礼とは思いませんか、ものにはエチケットと言うものがあ

りますよ〟と言っていました。私が出て行くと、先生、おうかがいしたいと思って上りましたと言うのです。何んですかと言って聞くと、いきなり無量義経の『四十余年未顕真実』と言い出して、浄土は邪教だと言うのです。」

「それでどうしました。」

「あれは天台大師のお考えから出ているもので、五時八教の教判を立てるための方便として使われたものである。浄土宗には浄土宗の教判と言うものがある。と言うと、それは難行道易行道でしょうと言うからそうだと言いました。」

「教判論ですね。」

「そうです。あなた方は五尺の生身をもって、法華経に説かれているような仏知見を得ることに自信がおありですか、天台大師は教の面より申されたのですが、法然上人は私たちの機根の面より、実際に私たちをおすくい下さる面より説いておられるのです。と申しますと、何んだか解ったような解らぬような顔をしていました。」

「そうですか。」

「あなた方は法華経をほんとうに端から端までお読みになったことがありますか、と聞きますと、自信をもって答えたものはありませんでした。」

「一体何人来たのです。」

「全部で七人でしたが、話をするのはそのうちのしっかりしたような人、一人でした。」

「それからどうしました。」

「でも先生、四十余年未顕真実と言うことがあるでしょう、と言うのです。たしかに無量義経と言うお経の中にはそれが書かれてあります。でもこれは経典をつくった人がその時代に合うように書かれたことでしょう。と申しますと、また、何んのことか解らなくなってしまったようでした。」

「今度は経典成立論ですか。」

「そうです。でもこれは言って見るだけで何もならないことですね。こんなことをしていて三、四十分たちました。私は夕方のおつとめがあるからあなた方も一しょにお念仏をとなえて下さいと申しましてさそいましたが、行かないと申しますので、ではここで一しょにお念仏をとなえて下さいと申しましてお十念をしましたが、ただだまって立っていました。最後に家内が、たばこのすいがらがちらばっているから掃いて行って下さいと申しますと、きれいに掃いて行ってくれました。」

以上が紫雲寺さんにおける寺折伏の姿であった。

ここで考えるべきことは、「四十余年未顕真実」と言うことを、そのまま釈尊の直説として、信じ、また、他にこれだ

けを教えられたものはそれを真実として信じきっているこの事実である。

言うまでもなく大乗経典非仏説は、もはやうたがう余地なき世界の定説である。経典作者はこの経こそ真実の経典であると言うことを、おそらくどの経典にも強調したであろうし、また、その真実性の度合いに於ては、どの経典も、古今東西を問わぬ真実性をもっており、それ故にこそ、釈尊金口の説法として、はずかしからぬ経典として、その風格を後の世にまで伝えていてくれるのである。

法華経も無量義経も無量寿経も阿弥陀経も、すべてひとしく釈尊直説の域を逸脱せぬ経として、後世の仏教徒はこれを信じ仰いで来たのである。

たまたま無量義経の中に、「四十余年未顕真実」の句があったとしても、これは経典作者の、この経を意義づけんとした方便であって、他経を誹謗しようと言う意途によって書かれたものではないと思う。もしそうであったとしたら、これは仏説ではない。

釈尊の直説に最も近いものとして、雑阿含経が挙げられている。この中に後世大乗経典の基となるべき経が数限りなく説かれてある。法説もさることながら、喩の如き、全く同じものが各所に見出だされることに驚嘆する。

浄土教の如きも給孤独長者が、いかに身分が高い人でもまた低い人でも、男でも女でも年寄りでも子供でも、私の家に来て三帰五戒を受けて、仏法僧の三宝に帰依し、仏の名を称えるものは命終のときに皆往生して天上の楽しみを受けられるものなのでしょうと釈尊におたずねすると、釈尊は「善いかな、善いかな、長者、あなたの信心を以っての故に、よくこの説をのべられました。まったくその通りです。そのような人々は命終すれば皆ことごとく天に生じますよ。」と説かれている。（雑阿含経、巻の第三十、給孤独経）これは正しく阿弥陀経の原となるべき経文であると私は確信している。したがって阿弥陀経は釈尊の直説であるのである。たとえそれが後世のどこのどの仏弟子が、どのように作られたとしても。

しかし、「四十余年未顕真実」と言う句に当るべき経は、私の拝読した限りに於ては雑阿含経の中には見出せぬのである。私は学者ではない。まだ見落しもあるだろうし学究的な方法も粗末ではあるだろう。はたして阿含経が釈尊の直説に近いものであるかどうかについても、学問的にはいろいろと問題も多いことと思う。しかし私は、経典の発展をそのように受けとり、実際の問題に当って拝読して見ての結果である。

延びる組織の現状

今日創価学会は、三百六十万世帯となったと言っている。昨年十一月頃、三百万世帯を突破した後の数が、六十万もあるとすると、大変な延び様で、月五万平均の世帯が入会していることになる。

世帯というのは、家を単位にした呼称であるから、一人でも一世帯であれば、家族全員でも一世帯であるから、平均すると、一世帯三人と見て、約一千万人になるわけである。彼等が一千万信者と呼号するのは、こうした所からである。世帯を単位とすることは、一世帯ごとに本尊がある「おまんだら」を頂くからである。これは、入会のしるしとして、本山から預るというのが立て前で退会したときは返却することになっている。

ところで、果して、三百六十万世帯、一千万の信者がいるのであろうか。日本の十分の一もの信者がいるのであろうか。この点は、甚だあやしい。「おまんだら」を頂いた者は確かに三百六十万世帯いるかも知れないが、そのすべてが全部、今も会員であるとは考えられないからである。現に、どの寺でも、多くの人々が、会からぬけ出て、寺に「おまんだら」をあずけにきたり、焼いて捨てたり、川に流したという人もいる。実際に会に入ってみて、馬鹿々々しくなって出てきた人も随分いるのである。そうでなくても、退めたいのは山々でも、色々の関係や、強制等から退められないで困っている人も相当数いる。こう見てくると、三百六十万世帯は、相当、割り引いて見なければならない。

先の参院選挙で、全国の総得票が、四百余万票であった。どうも、この数字が、その大体を示している様である。しかし、それにしても大変な数字である。どの大会場も満員となる現状からしても、学会の会員数の多いのに驚く外無い。余り驚いてばかりいてもいられない。常にわれわれは、相手の実状を知りつつ、それへの対策が必要である。

左の図表は、学会組織の全国的分布図（聖教新聞、九、一〇掲載）であるが、国内的には、二十五本部、八十五総支部、四百五十五支部の組織になっている。この外、海外にアメリカ、東南アジア、ヨーロッパ、中近東へと、次第に、その布教を進め、組織的にも一本部、五総支部、二十五支部と、拡張している。その拡張は、まことに、すばらしいものである。

特に最近の発表によると、秋谷、藤原、渡辺という中枢の三幹部を、ソ聯に視察派遣することになっている。九月二十五日から約二週間モスクワ、レニングラード、キエフ等に出掛けることになっている。民情視察というのが、その主な理由であるが、これは学会の宣伝と、更には布教の可能性を見てくるのに

違いない。共産圏の本域まで乗り込むとあっては、なかなかの意気込みであり、われわれも、注意しなければならない。

最近、東京の四つ谷に立派な本部が完成した。いよいよここを根城として、大発展をしようとするわけであるが、全国の組織と共に、ますます過激宗教は猛威を振いそうである。

学会の組織は、大方も承知の様に、タテ線とヨコ線とされる縦横の組織でガッチリ仕組まれている。タテ線というのは、折伏の系統を主にした組織である。ある人が誰かを折伏すると、又その人が、誰かを折伏する。こうして、縦に無限に拡がるのが、タテ線の組織である。従って、タテ線の組織の支部長の下には、北海道のもいれば、九州のもいるというわけである。親子の様な関係であるため、この組織は極めて固いのであるが、何分にも広範囲にわたる様、指導をしたり、集めたりするのに、不便である。こうした事から出てきたのが、ヨコ線とされる地区別ブロック制である。従って、タテ線と、ヨコ線は、極めて交錯しているわけである。前に掲げた組織別数は、ヨコのブロック別組織であり、写真の図表も、それを示したものである。しかし、この両組織がガッチリ組まれているところに、学会の団結の強固さと、組織の動員力がある。一般の組織などより、はるかに強く、はげしいわけである。而もその根幹的紐帯に信仰があるのであるから、大変なものである。新しい寺づくりなども、こうした事を研究して　これに対抗して行っては、どうであろうか。

おしらせ

新版ひめくり

心の歩み

価格　七〇円〒　三〇円

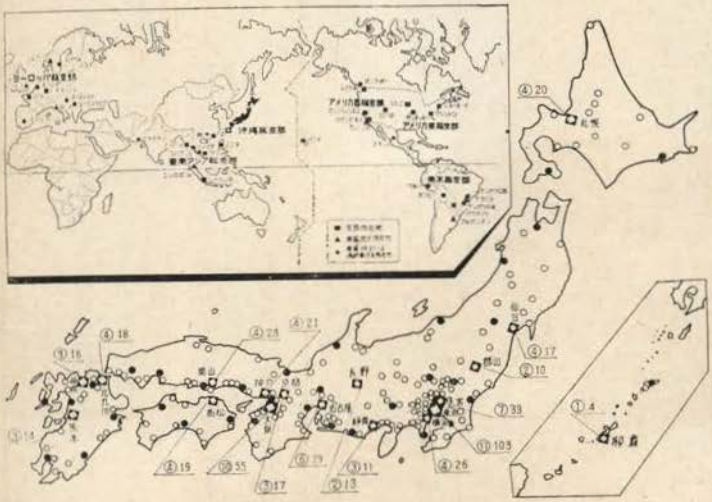
体裁　タテ四三㎝ヨコ一四㎝

用紙　十六枚　二色刷

（三十九年度日曜表付）

一〇部以上より割引あり

お申込みは　鑽仰会へ



一枚起請文講話（四）

信仰の極致

村瀬秀雄
（大正大学幹事）

ただ往生極楽のためには
南無阿彌陀仏と申して、
疑ひなく往生するぞと
思ひとりて、申す外に
は別の仔細候はず

一、唯一無二の行

法然上人は自分の心の動きをみつめながら常に深く反省し、更に容赦なく批判を加えてゆくところからご自分の人生観をたてられました。われ聖教を見ざる日なしと御述懐になり、多聞広学をもって知られながら、ご自分のことを黒白をも知らざる童子の如しといわれ、是非も知らざる無智の者にすぎないときめつけられました。もっともこのような自己反省をされた宗教家には、独り法然上人ばかりでなく善導大師、聖徳太子、伝教大師等々多くの先徳たちがおられます。

このような人生観にたって凡人の救われる道、庶民の宗教を求められた結果、信仰の目標を往生極楽におき、行として念仏を得られました。従って「南無阿弥陀仏と申して、疑ひ

なく往生するぞと思ひとりて、申す外には別の仔細候はず」の一句は、法然上人のご信仰の結論であって、念仏信仰の宣言であるというべきものであります。

「疑ひなく」は深く信ずること、信じて動かぬ様子のことであり、「思いとりて」は心に悟ること、決心することですから、「疑ひなく往生するぞと思いとりて」は心のすえ方を申されたものです。これを安心決定といいます。次にこの安心を実践することを起行といいますが、「申す」とあるのが起行にあたります。次に「別の仔細候はず」というのは、それ以外には詳しいいわれがないということです。つまり往生極楽という信仰目標を達成するには念仏が必要にして且つ充分なる条件であるということです。

この一句と同じく大切であり、法然上人の宣言ともいう句がもう一つあります。即ち

「南無阿弥陀仏、往生の業には念仏を先とす」（選択本願念仏集）

と、選択集の開巻劈頭に、特に書き加えられた一句がそれであります。この句を解釈して二祖鎮西上人は口称念仏が第一の行であることを示したとされ、また三祖記主上人は念仏が最要であるとの意味とされました。そして古来この句は恵心僧都の著作からの引用であるとされています。しかしもし引用文であるなら本文中に引用すべきで、開巻劈頭に別記されたには何か別の意味が含まれているのでないでしょうか。

なるほど恵心僧都は次の三通りの言葉を使用しています。即ち「念仏を本とす」といい「念仏を最とす」ともいい、更に「念仏を先とす」との言葉があります。この句の意味するところは、往生の業として念仏が根本であるとされ、または最勝であるといわれ、更にまた最要の行であるということです。これら三通りの表現は、何れも似たような意味ですが、念仏とその他の行と比較しての上で申した言葉であります。ところが法然上人にあっての念仏は、他に比較すべきものがないのであります。優劣を決めるべき相手がないのであります。凡夫が往生できるためには念仏しかないので、念仏こそ唯一無二の行なのであります。言葉の上では恵心僧都が使った言葉と同じものを使用されましたが、そのもつ意義はまるで違うと思います。

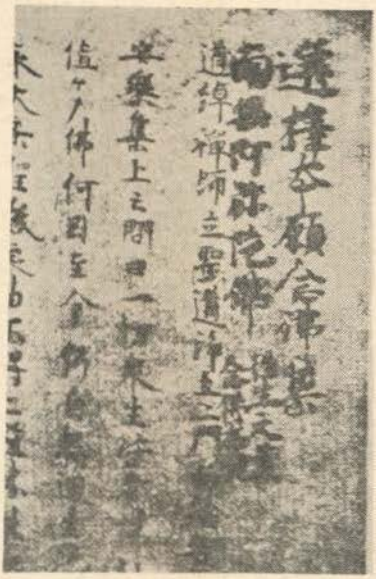
法然上人はご流罪になる時、藤原兼実公にこう申されました。念仏という同じ信仰に生きている者は同じ光明に摂取されながら暮しているのであるから、たとえどんなに遠く離れていても、どんな辺地に住んでいても、お互同士はごく親しい仲であります。そしてこう言葉をつかれました。

「念仏をこととせざる人は、肩を並べ、膝をくむといへど

も、源空に疏かるべし。三業皆異なるが故なり」（十六門記）

ここに三業皆異るというのは、その人の思考、行為、言語の全部が違うというのですから、いわば異質の人ということです。念仏を申さぬ人は、たとえ一諸に肩を並べ、共に膝を組んでいても、異質の人は疏遠であると申されたわけで、これ程強い言葉が他にあるでしょうか。

念仏を先とするというお言葉は、念仏はすべてに先行するものだとの意味だと思います。人間としては考えること、反省することがすべての行動に先行するのと同じように、凡人であると自覚し、念仏申すことがすべての行に先行することだというお考えであったと思います。



（撰択集）

二、念は即ち是れ唱なり

南無阿弥陀仏というのは、阿弥陀さまに帰命し奉るという意味です。阿弥陀さまは梵語の音を漢字で記したもので、その意味は寿命と光明とが無量の仏さまということです。つまり阿弥陀さまは寿命無量、光明血量を神格としています。

「ここに知る名号の中には光明と寿命との二義を具へたる事を。かの阿弥陀仏の一切の徳の中には寿命を本と為し、而して光明勝れたるが故なり」（逆修説法）

と申されています。仏さまの徳に有限のものがある筈もないので、当然寿命が無量であるべきだと理解もし易いわけですが、法然上人は寿命無量にもう一つの意味を認められました。即ち衆生を救う手段として寿命が無量なのだとされました。

「抑も弥陀如来の寿命無量の願を発し給ひしは、己が身を愛惜して長寿の果報を求め給ふにはあらず。ただ是れ済度利生の方便にして、亦衆生をして欣求の心を発さしめんがためなり。一切の衆生皆寿命の長遠を願ふが故なればなり」（逆修説法）

次に光明が無量であるということは、仏さまは測り知れない光明、どこでもいつでも照す光明であるということの外に、いろいろの功徳があります。この功徳は十二通り数えられて十二光仏の名があります。その中の二三をあげると、こ

の光明に浴した者は貪欲の罪が滅せられ、無貪清浄の人となります。人は自分が怒って自分を苦しめますが、この光明に浴すれば怒りが自然に消えます。また愚痴の者がこの光明に浴すれば愚痴の心を滅して智者と同じことになり得ます。その他無戒破戒の罪が滅して持戒清浄の人となる等いろいろの功徳がありますが、十二光の中の無礙光について、法然上人はこう説かれています。

「無礙光とは、この世界の日、月、燈燭などの光の如きは、もし隔礙あれば即ち照曜すること能はず。しかるに彼の仏の光は十方の世界に徹照せずといふことなし。もし夫れ然らざれば、即ち此の世界の念仏の衆生は、彼の仏の光摂を蒙ることを得ざるべし」（逆修説法）

ここに念仏の衆生とあります通り、念仏申さぬ人々には関係のないことであります。観経に「光明は遍く十方世界を照して、念仏の衆生を摂取して捨てたまわず」とあるのも同じ意味をもっています。

さて、念仏といえば南無阿弥陀仏と口に唱えることですが、文字の上からいって仏さまを心に念ずるという意味があるのではないか、念仏とは名号を口で唱えることだけに限らなくてもよいではないかと考える人があるかも知れません。たしかに文字の上の解釈では無理のないことです。法然上人もこの点を十分ご存知であったのは勿論のことです。

「口にてとなふるも名号、心にて念ずるも名号なれば、いづれも往生の業とはなるべし。ただし、仏の本願は、称名の願なるがゆへに声をたててとなふべき也」（十二問答）

と申されている通り、本願の念仏は口で唱える念仏であるというのですから、文字の解釈がどうあろうと問題にならぬことです。それなら本願とは何かといえば、阿弥陀さまがまだ仏さまにならぬ時、法蔵菩薩といわれていた時分に、何んとか衆生を救って浄土に導きたいという大願をおこされました。そして長い歳月に亘って苦慮され、且つ徳行を積まれ、その結果大願を成就して仏さまになりました。この成就された内容は、南無阿弥陀仏と口で唱えた者は必ず浄土にゆけるということです。そしてこの大願を本願といいます。つまり衆生は本願の力によって、念仏すれば救われるのです。それなら本願念仏がどうして口唱念仏に限られるのかというと、念仏の念は声ということであるからです。この理由を説明してこう申されました。

「念声はこれ一なり。何をもってか知ることを得たる。観経の下品下生に云はく、声をして絶えざらしめ、十念を具足して、南無阿弥陀仏と称せしむ。仏名を称するが故に、念々の中において、八十億劫の生死の罪を除くと、今この文に依

るに、声は是れ念、念は即ち是れ声なること、その意明けし」（選択本願念仏集）

この文に続いて、法然上人は、念は即ち是れ唱なりと申されています。つまり十念とは南無阿弥陀仏と声を出して十回唱えることであります。この一声一声の念仏が往生極楽の行為となります。更にいえばこの一声一声が阿弥陀さまと一体となるのであります。一声の念仏も、十声の念仏も、その功徳に勝劣はありません。この勝劣のないことを信じて、猶かつ一生涯を通じて行住座臥に念仏を唱えることが念仏行者というものであります。

「一念十念に往生をすといへばとて、念仏を疏想に申すは、信が行をさまたぐるなり。念々不捨者といへばとて、一念を不定とおもふは、行が信をさまたぐるなり。信をば一念にむまると信じ、行をば一形にはげむべし」（常に仰せられける御詞）

とのお詞をよく味うべきであります。ここに一形とあるのは一生涯のことであります。

三、すけさざぬ念仏

信仰目標を往生極楽におき、そこに達するためには本願を深く信じて口に南無阿弥陀仏と唱えればよいことは判りました。しかしそれでよい、それ以上は何も要らないといわれると、それがかえって難しいことであります。

念仏を申せば救われるのですから、その人が学者であってもなくても、慈悲深い人であってもなくても、こうした人間的区別には何んの関係がないのです。ここに阿波介という人がいました。彼はもともと無頼の徒でしたが、後に法然上人に帰依し、二連珠数を考案したといわれる位に熱心な信者となりました。しかし無智である点はどうにもならず、お弟子の中でも軽く思われていました。こうした彼を例にとって法然上人は申されました。

「あの阿波介も、仏たすけ給へとおもひて南無阿弥陀仏と申す。源空も仏たすけ給へとおもひて南無阿弥陀仏とこそ申せ。更に差別なきなり」（勅修御伝第十九）

実際の問題としては、破戒無慙のものの申す念仏よりも清浄な生活をしている者の申す念仏の方が有難いもののように思われます。法然上人はこうした考えの間違いであることを人毎に繰り返し繰り返し懇切に説かれました。教義上の説法をするよりも、こうした人情の上の説得の方が余程難しかっただろうと思います。中でも禅勝房に示されたお言葉が総括的に申されたお言葉であります。

「念仏の機は、ただむまれつきのままにて念仏を申なり。

智者は智者にて申てむまれ、愚者は愚者にて申てむまる。道心ある人も申てむまれ、道心なき人も申てむまる。乃至富貴のものも、貧賤のものも、慈悲あるものも、慈悲なきものも、欲ふかきものも、腹あしきものも、本願の不思議にて念仏だにも申せば、いづれもみな往生するなり」（勅修御伝第四十五）

これと同じことになりますが、念仏には何等の助力も必要としないとのお言葉があります。

「本願の念仏には、ひとりだちをさせて、すけをささぬなり。すけといふは、智慧をもすけにさし、持戒をもすけにさし、道心をもすけにさし、慈悲をもすけにさすなり。善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただむまれつきのままにて念仏する人を、念仏にすけささぬとは云也」（十二箇条問答）

念仏の衆生を救って下さることは、仏さまの慈悲ですから、小賢しい人間のはからいは何んの役にたたぬものであります。二祖鎮西上人と十六門記の著者聖覚上人に向って、法然上人はこう申されました。

「妄念余念をもかへりみず、散乱不浄をもいはず、唯口に名号を唱よ。もしよく称名すれば、仏名の徳として妄念おのずから止み、散乱おのずから静り、三業おのずから調いて、願心おのずからおこるなり」（十六門記）

念仏を申すのには、何らの準備もいりません。何等の基礎資格といったものもいりません。学問を積むとか、身体を清浄に保つとかいった特別な手段や方法を講ずる必要がないのです。即ちこう申されています。

「念仏は様なきをやうとす。ただひらに仏語を信じて念仏すれば、往生するなり」（勅修御伝第二十一）

要は深く信じることであります。本願を信じて念仏は申せば、あらゆる凡夫、衆生のすべてが必ず救われます。ただそれだけであって別の仔細がないのであります。これこそ信仰の極致であり、最高の価値であります。仏さまの名号は他の功徳に勝った功徳をもっています。しかも誰にでも実践できる易行によって救われるのです。

再版のおしらせ

村瀬秀雄著

浄土宗 **日常勤行式の解説**

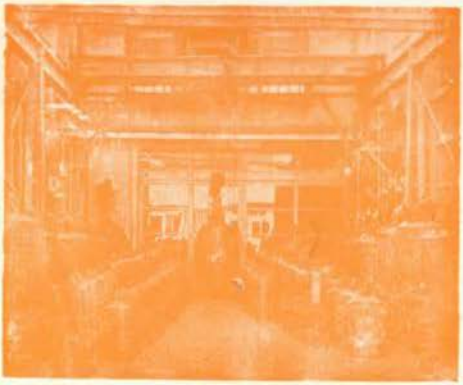
新書版九〇頁
定価 百 円
送料 二〇円

ながらくお待たせをいたしました在家の方々におくってよろこばれる檀信徒のためのハンド・ブック

（百部以上 一割引 送料無料）

日本一の生産・設備

梵鐘（45cm～85cm）
在庫豊富
喚鐘（12cm～51cm）
音響　理学博士　青木一郎先生
梵鐘界の権威　日展参事　芸術院賞受賞　香取正彦先生



鋳物師　老子次右衛門
大阪市北区曹根崎町一丁目
大阪ヨリ十五分（梅田新道大映横東へ一丁右側）

株式会社　老子（おいこ）製作所　大阪支店
電話大阪　(34) 8847番　本社工場　高岡市横田

編集後記

▽現代人は宗教に対して無関心であるといわれるが、一方宗教書はかくれたベストセラーをつづけている。果して現代人は宗教に対し無関心であろうか。仏教についていかに考えているであろうか。内輪で右往左往していたずらに自信喪失しているより、虚心に外の声に耳を傾ける必要がある。

▽今月号は「現代仏教批判」の特集を試みた。いずれ批判の批判がなされるであろうが、前向きの論争を期待したい。

▽「ありのままの宗教」は仲々好評である。宗門づくりのためにも第一線の教師の方々の御苦心をお聞きしたい。

「浄土」講読規定

一部　定価　金五十円（送料　六円）
会費一カ年　金六〇〇円（送料　不要）

浄土　十一月号

昭和十年五月廿日
第三種郵便物認可
昭和三十八年十月廿五日　印刷
昭和三十八年十一月一日　発行
定価　五十円

編集人　宮林昭彦
発行人　佐藤密雄
印刷人　関二三男
印刷所　新光社印刷株式会社
東京都千代田区飯田町一ノ二二
発行所　法然上人鑽仰会
電話東京三三二局五九四四番
振替東京八二一八七番

昭和十年五月廿日　第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和三十八年十月二十五日印刷　昭和三十八年十一月一日発行

浄土　第二十九巻　第十一号　定価金五拾円（六円送料）